

美術関連資料のアーカイブ構築と活用

2018年度活動報告

本プロジェクトは、次の2つのアーカイブ活動の総称である。ひとつは、名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる森村泰昌(1951-)の文献資料を対象とする「森村泰昌アーカイブ」(2000年5月～)であり、もうひとつは仏教美術、京都の文化、また美術作家の作品や展覧会の記録など幅広く撮影し続けた写真家井上隆雄(1940-2016)の写真資料を扱う「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」(2017年4月～)である。

森村泰昌アーカイブでは、新聞記事を中心に整備し、文字データは1996年から1999年まで、画像データは1994年と1997年、1996～2001年の一部を入力した。また、一昨年度より芸術資源研究センターにて公開中の森村泰昌関連資料データベースの改良ならびにデータの修正追加を行い、より使いやすく内容も充実させ、2018年11月に大阪でオープンしたモリムラ@ミュージアム(M@M)とも連携しつつ、資料の活用について検討した。

井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究では、昨年度より継続して、データベース構築のため、大項目の目録作成を進めている。ポジ袋が多数入った写真収納箱だけでも479点あり、公文書館や図書館での分類法に則って進めていくことができないこれらの資料群(収集アーカイブ)に対しては、やはり階層型のデータベース構築が重要だと考えている。関連して、本プロジェクトでは「オープンアクセス」の意義を重視している。その取り組みのひとつとして、2018年11月より、井上隆雄が残したインド・ラダック仏教壁画の資料群に対して共同研究を開始した(「井上隆雄写真資料のアーカイブ構築に基づいたラダック仏教壁画のグラフィック的観点からの表現技法研究」、共同研究者:加須屋誠氏(芸術資源研究センター客員研究員)、正垣雅子氏(奈良芸術短期大学 日本画模写講師))。井上隆雄の写真資料には、インド・ラダック地方の写真群があり、外国人の入域制限が解かれた1974年頃の仏教壁画群に関する1,000点を超えるポジ類、多数の資料類が残されている。その時の撮影をもとに1978年に駉々堂より出版された井上隆雄『チベット密教壁画』があるが、これは資料的価値も高く、歴史的価値の大きな写真集であり、横尾忠則による極彩色の装丁はブックデザインとしても優れている。ただし収録から抜け落ちた資料群も多数あり、また撮影・取材ノート、メモ類も残されている。この共同研究を通して、これら資料群のデジタル化とデータベース構築を進めつつ、ラダック仏教壁画の表現技法について再検証し、『チベット密教壁画』のアップデートを検討している。

一方、日本の戦後美術史上におけるエポックメイキングな展覧会として、1970年に開催された第10回日本国際美術展(通称「東京ビエンナーレ」)-「人間と物質」展が知られているが、京都市美術館会場を撮影した資料(ネガ)が確認された。近年、戦後美術を再考する動きが活発化している中で、本資料の歴史的価値も高い。早期にデジタル化する予定である。

情報発信としては、2018年12月1日に日本写真芸術学会関西支部 第2回シンポジウム「写真のアーカイブスについて2」において講演の機会を頂いた。また本学の作品展に合わせ、2019年2月8, 10, 11日には資料室を公開し、「井上隆雄「インド・ラダック仏教壁画」写真資料展」というタイトルで、先に述べた共同研究の活動紹介と関連するポジ、デジタル化したデータの紹介、取材ノートなどの資料類を公開展示した。

この2つのアーカイブ活動は、今後も管理・保管している実資料を対象に、データベースの構築とそのプロセスの検証を進め、美術関連資料からの美術・文化史研究への方法論をより多面的に検討していく

山下 晃平(美術学部非常勤講師)